



# けやき通信

Cooperative Faculty of Education, Gunma University News. "Keyaki"

第13号 (2023年2月)

## 共同教育学部の組織整備

群馬大学共同教育学部長 藤森 健太郎

大学、学部の組織体制というものは、よりよい教育・研究をするための手段です。大学運営に特段の関わりがない限り、説明されてもあまり面白いものでもないかもしれません。しかし考えてみると、共同教育学部という存在自体、本來說明の要るユニークなものです。宇都宮大学と群馬大学の「共同」の「学部」、大学の枠を超えたひとつの学部。とても挑戦的な組織なのです。そのことについては、この『けやき通信』でも、何回か紹介されてきました。同窓会など、ステークホルダーの皆さんにもご説明する機会がありました。次第にご理解をいただけるようになってきたと思います。そこで今回は、群馬大学側に焦点を絞って、共同教育学部になってからの、組織体制の変化等をご紹介します。

学部運営の中心に位置する合議機関として、教授会があります。教授会のもとに、教育・研究上重要な業務について、委員会が置かれています。人事・予算、教務、入試、学生支援、国際交流、教育実習、評価、カリキュラムの各委員会が代表的なものです。以前は、今挙げたうちの人事・予算から学生支援までの各委員会が、常置委員会という枠で特に重視されていました。国際交流も、後に常置委員会の枠に入りました。

もともと常置委員会の枠にあった諸委員会の名称を見ると、学部の仕事を着実に執行することに最大の重きが置かれていた感があります。しかし今では、大学や学部には、業務の執行や成果を常に点検・評価し、必要に応じて改善する機能の強化も同等に求められています。教育の質を評価・点検する評価委員会や、将来の教育課程の改善に当たるカリキュラム委員会の重みが増してきていると言えます。また、学校現場との往還を通じて即戦力・実践力を持つ人材を送り出すための諸事業を主催する教育実習委員会の重要性も増していました。

そこで昨年度には、常置委員会の枠を事実上解消し、

教育実習、評価、カリキュラムの諸委員会の重要性を明確にし、評価委員会については組織強化をした上で、主に効率性の観点から、各委員会の構成、規則、委員長等選出方法等の改革を実施しました。また、共同教育学部の設置準備や大学院の再編の過程で、臨時的組織が設けられていたり、既存の組織の職域が拡張されたりしていました。それぞれの段階では必要なものでしたが、この際、整理・統合を行いました。その上で、諸委員会等の課題を持ち寄って議論する学部運営会議を設けました。教授会に報告・提案される案件のうち重要なものは、学部運営会議の検討を経ることになっています。

以上の結果、群馬大学共同教育学部の組織体制は、だいぶわかりやすくなったと思っています。共同教育学部の場合には、各委員会の業務それぞれについて、宇都宮大学の当該業務との連携・調整が必要となります。群馬大学内の組織運営を効率化しなければ、共同教育学部全体の運営に割く余力など生まれにくいわけなのです。

こうして書いてきましたが、結局、組織の内輪の面白くない話、だったかもしれません。しかし、組織表をわかりやすくする、で終わる話ではないことは、ご理解いただくと幸いです。ここまで積み上げてきた組織の効率化、教育・研究の評価点検・改善機能の大幅強化の上で、来年度の完成年度（最初の卒業生が出る年度）における評価・点検、再来年度の改善カリキュラム実施という大仕事が成し遂げられればと思っています。もちろんその際には、宇都宮大学との連携組織が、群馬大学内の諸組織にもまして大きな役割を果たすこととなります。今回はそこまで紹介することができませんでした。いずれまた紹介されることもあろうと思います。



## シンポジウム「ぐんまの教師力を高める 2022」

教育学研究科専門職学位課程長 音山 若穂

11月20日(日)、公開シンポジウム「ぐんまの教師力を高める 2022：生涯学び続ける教師をめざして—教職大学院の課題研究を通じた授業力向上と学校課題の解決—」(主催：国立大学法人群馬大学と群馬県教育委員会との連携に係る協議会、共催：前橋市教育委員会)が、2会場で同時開催されました。

シンポジウム①の話題提供は塩谷啓子先生(前橋市立荒牧小学校)、2020年からスタートした授業実践開発コースの第1期修了生です。「小学校国語科における説明的な文章を教材とする『読むこと』の学習指導の改善」と題して、大学院在学時のご自身の研究課題と勤務校での実践について話題提供されました。

塩谷先生は、これまでのご自身の授業における実感を課題研究の出発点として、同時に OECD 生徒の学習到達度調査(PISA2018)と全国・学力学習状況調査2019といった大規模学力調査の結果を踏まえながら現代の小学校児童が「論理的思考能力」に課題を抱えるという実態に着目されました。そして、こうした課題へのアプローチの1つとして、説明的な文章を教材とした「読むこと」の授業改善に取り組みされました。

その授業改善によって目指すところは、児童たちが説明的な文章を読むなかで、内容の理解にとどまらず、筆者の考えに対して自分の考えをもち、それを広げたり深めたりする姿の実現でした。そのための手立てとして、塩谷先生は「読みの目的」と「質の高い言語活動」に着目し、「自己・他者・対象との対話を促すワークシート」を導入したり、そのなかでまとまった自分の考えをグループに伝え聞き合う場面を作ったりして児童たちが主体的で対話的に学ぶ流れをつくり出していました。こうした授業実践において、児童には読むことを通して仲間の

意見や考えを聞き合いながら学ぶ姿が見られるようになったとともに、そこでの対話性の発揮と連動するように質の高い読みや個々の考えが深まっていく様子が実現していきました。



以上の塩谷先生の話提供の後には、在学時の指導教員の濱田秀行教授からコメントが述べられるとともに群馬県教育委員会義務教育課の柴崎厚志指導主事から指導講評がなされ、授業改善のなかで児童とともに塩谷先生自身が変わっていくプロセスと塩谷先生の実践の現代的意義について参加者の方々と共有することができました。

シンポジウム②では、「生徒の困り感の解消を目指す校内サポート体制の見直し—児童・生徒理解の充実と外部機関との連携を通して—」と題して、教職リーダーコースの第1期修了生である木戸健裕先生(太田市立西中学校)が話題提供されました。

木戸先生は勤務校の実態を踏まえ、何よりも生徒の「できにくさ」「困り感」に寄り添った支援を行ないたいと考えました。そのためには多様な「個」に応じた支援を組織的に行なう、連携体制を構築する必要があります。そこで、特定の児童・生徒に限定せず、すべての児童・生徒のアセスメントを行うための「児童・生徒理解シート」を新たに開発しました。

これは既存の支援シートとほぼ同じ形式ですが、学年ごとに分かれ、小学校からの成長の様子や特性・家庭環境の変化や、人間関係などの記録が9年間分蓄積されるようになっています。普段の生活や各種アンケート、保護者との面談から分かったことをもとに特記事項を記載、書式も統一して次年度以降に引き継げるようにしました。

本年度も引き続き実践を進め、このシートをもとにしたケース会議を行ったり、ブロック協議会で小学校の担当者とのシートについて協議の時間を設けたりするなど、定着を進めています。

木戸先生は大学院修了後、市の教育研究所の研究員として、さらに研究を進めており、勤務校以外でもシートの活用が始まっています。教職大学院での2年間の研究は、院生個人を成長させるだけでなく、その成果がこうして地域に広まることで、ぐんまの学校や教師の課題解決力や実践力を向上させることに繋がっています。話題提供の後には、実務家教員の坂西秀昭教授からコメントがあり、フロアからの質疑応答も含め充実したシンポジウムとなりました。

今回は両会場とも、対面とオンラインの併用でしたが、全体で百名近い参加があり、充実したシンポジウムとなりました。関係者各位に深く感謝いたします。

## 令和5年度採用 群馬県教員採用試験結果

学生支援委員長 山口 陽弘

令和5年度採用群馬県教員採用試験の本学合格者は、現役100名、既卒者43名、合計143名という結果でした（表1参照）。全体合格者に対する占有率は、小中特別支援学校が34.3%、高等学校が21.8%、全体では32.7%でした。表2は平成31年度から令和5年度までの志願者数（現役生）に対する一次・二次試験合格者数と合格率を示すものです。一次、二次試験の合格率は昨年度に比べ少し上昇しました。占有率は僅かに減少し、40%を割っています。何よりも志願者数が昨年と比較して1割近く減ったことは、今後の大きな課題です。

昨年度と比較し、少しずつ対面での採用試験対策に戻しております。この一年間では、特別講演会や合格体験記などはオンラインで開催しましたが、直前の「二次試験対策講座」は対面で実施いたしました。また、本年度も同窓会による支援事業（面接試験の相談会・1年生に向けた講演会）も実施され、同窓会のご協力に感謝しております。

今後も学生支援委員会の事業にご理解とご協力をお願い申し上げます。

表1：群馬県公立学校教員採用試験の校種別結果と占有率（既卒者含む）

令和5年度採用	全体合格者数	本学合格者数			占有率	
		現役生	既卒者	合計	現役生	全体
小学校	125	22	7	29	17.6%	23.2%
中学校	206	64	26	90	31.1%	43.7%
特別支援学校	51	7	5	12	13.7%	23.5%
小計	382	93	38	131	24.3%	34.3%
高等学校	55	7	5	12	12.7%	21.8%
合計	437	100	43	143	22.9%	32.7%

表2：群馬県公立学校教員採用試験志願者数（現役生）と合格率

採用年度	志願者数	一次試験合格者数 (志願者に対する合格率)	二次試験合格者数 (志願者に対する合格率)
令和5年度	137	118 (86.1%)	100 (73.0%)
令和4年度	150	123 (82.0%)	101 (67.3%)
令和3年度	158	138 (87.3%)	102 (64.6%)
令和2年度	154	136 (88.3%)	113 (73.4%)
平成31年度	187	146 (78.1%)	126 (67.4%)

## 令和4年度の新型コロナウイルス対応 ～対面授業の本格再開と今後の課題～

教務委員長 佐野 史

群馬大学・宇都宮大学共同教育学部が発足した令和2年度は新型コロナウイルス感染症が広まった年でもあったため、共同教育学部第一期生の大学生活はオンライン中心という変則的な形で始まりました。それから2年が経った今年度になって、ようやく対面授業を本格的に開始することができました。

令和4年4月からは、座席は一つおきとし、毎朝の検温と体調チェック、QRコードを用いた座席申告を課すなど、さまざまな制限下で対面授業を行い、お蔭様で大きな問題もなく、無事に前期を終えました。後期は一週間の全学的なオンライン授業期間後はほとんどの授業が対面で実施されています。依然として手指の消毒や部屋の換気など感染症対策をこまめに行いながらではありませんが、全学の制限撤廃に伴って教室の収容人数を100%まで可とするとともに、国の全数把握見直しを受けて体調や座席管理も学生各自に任せるなど制限をかなり緩和しました。その結果、11月現在、従来に近い活気のある大学風景が戻ってきています。

共同教育学部を特徴づける遠隔対面授業も本格的に実施できるようになりました。写真はその典型例で、左側スクリーンに資料、右側に宇都宮大学の教員の映像を映すことで、約100kmの距離を感じさせない授業が展開されています。ただ、本格的な始動とともに、両大学の学生を交えた対話型の授業が行いにくいなど、遠隔対面授業特有の問題が表面化してきています。コロナ対応が一段落した今、機材や教授方法の改善を図り、学生の学びをより充実させていきたいと考えています。



宇都宮大学発信の遠隔対面授業の様子

## 海外協定校とのオンライン国際交流が展開しています

国際交流委員会 菅生 千穂

経験したことのない感染症パンデミックにより、海外への実留学が2年以上ストップしました。一方でオンラインの活用が広がり、全学ではオンライン留学も展開されています。そんな中、共同教育学部では2022年1月から3月にかけて、海外の協定校とオンラインで繋がる交流会や講演会を計4回実施しました。

第1回は、インドネシアと韓国の日本人学校を繋ぎ、共同教育学部家政教育講座の田中麻里教授と研究室学生による「バンドン&釜山 日本人学校と群馬大学学生の交流～防災絵本から洪水対応を考えよう～」でした。学生による防災絵本の読み語りの後、バンドンや釜山の児童生徒が、現地での身近な自然災害とその防災について考えました。インターンシップ留学生を本学部・本研究科から派遣してきた2国の日本人学校同士が一つの会で交流する初めての機会となりました。

第2回、第3回は、モアヘッド州立大学（米国）の Dr. Kim Nettleton によるスペシャル・レクチャーで、教

育実習生や初任教員に必要な「学級・授業運営のマネジメントについて」講演されました。

第4回は、ピューージェットサウンド大学（米国）の Dr. James Doyle を講師とし、パンデミック下で、世界中の打楽器奏者が自宅にある植木鉢などのボウルを楽器として作り上げたオンライン演奏の様子、群馬大学生とのオンライン演奏実践についてレクチャーされました。

感染症と世界情勢の不安が続き、海外との往還の停滞が心配されますが、オンラインを活用したこの企画は、今年度も引き続き実施する予定で、新たな交流の展開を継続していきたいと考えています。

全4回の詳細な報告は、共同教育学部 HP の「ニュース&トピックス」(2022.03.18)からもご覧いただけます。  
<https://www.edu.gunma-u.ac.jp/news/2458/> ▶



## 令和4年度のオープン・キャンパス、体験型イベント

入学試験委員長 齋江 貴志

今年度に入り、社会的にアフター・コロナの模索が始まり、本学でも中・高校生に向けた広報活動における対面実施が前向きに検討されています。とはいえ、例年7、8月に開催されている大学オープン・キャンパスは、参加者規模などから、本年度もインターネットを介したオン・デマンド形式での開催となりました。また新たな取り組みとして、Zoomを使った配信による授業体験が、理科専攻と社会専攻それぞれで実施されました。

一方、昨年度実施した音楽、美術専攻での対面による体験型イベントが好評で、広報に効果的な取り組みだったことが確認できました。そこで今年度は、前年度実施の2専攻に数学と英語が加わり、計4専攻が8月6、7日に体験型イベントを計画しました。しかし、開催直前の7月に感染の第7波が始まり、音楽専攻は予定通り対面での演奏会を開催したものの、数学、英語、美術で

はやむなくリモートに切り替えての実施となりました。最終的に、本学部が実施した授業体験と体験型イベント（リモート及び対面）の参加者は計141名おり、本学部や志望専攻をより身近に、深く知りたいと考える高校生のニーズが高まっていることを実感しています。

遠隔地からの参加も可能なリモートと、大学を肌で感じられる対面でのイベントの両面で、これからも本学部と教職の魅力を発信していきたいと考えます。



音楽専攻の体験型イベント（演奏会）の様子



群馬大学共同教育学部ニュース「けやき通信」第13号（2023年2月）

発行：群馬大学共同教育学部

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2 / TEL: (027) 220-7204 / URL: <https://www.edu.gunma-u.ac.jp/>

・本紙に関するご意見ご感想等ございましたらお寄せください。